

東周秦漢時代の都市理論について

陳

力

古代ギリシア・ローマの歴史上、特に紀元前一世紀から紀元一世紀までの時期に、諸都市や都市計画の様々な側面について述べる専門書が数多く残されてきた¹⁾。しかし、中国においては、東周秦漢時代の思想家、文人により書かれた都市及び都市計画の専門書はほとんど残されていない。『漢書』芸文志に『明堂陰陽説』や『宮宅地形』などの都市建築、都市計画に関係するような書目が載せられているが、これらの書籍はいずれも散逸し、その全貌を見ることができない。このため、東周秦漢時代の人々がどのように都市のことを考えていたのか、この時代の都市計画がどのような思想・理論を根拠にしてたてられたのか、などの問題を検討するとき、現存する儒家の諸経および諸子書にある分散的な記載に頼るしかない。近年来、木簡、帛書などの資料が多数発見され、出土された『日書』などの書籍にも、すくないが、都市建設、建築に関する記載がある。

東周秦漢時代の都市理論に関する先行研究として、賀業鉅氏、孫宗文氏の研究が挙げられる²⁾。賀氏が提出した「都市計画思想」及び「秦制」の二つの概念は示唆的である。孫氏は『呉越春秋』に載せられている陰陽家の都市計画理論を紹介した。

西周時代の都市建設活動により、都市建設と都市を維持する経験がかなり累積されてきた。東周時代に至ると、これまでの都市建設、都市維持に関する考えを感性的認識から理性的認識にまで高めようとしていた。今まで残されてきた文献に、雑家、兵家、墨家、法家、陰陽数術家、儒家の学者の都市についての論述が保存さ

れている。その中、比較的、全面的に都市問題を探求した学派としては儒家、『管子』学派、陰陽数術家、墨家などが挙げられる。小論では、儒家、『管子』学派、陰陽数術家などの学派の都市に関する論述を整理し、儒家、『管子』学派、陰陽数術家の都市理論を検討したい。

I 儒家の都市理論

1. 儒家の都市概念

儒家の都市の概念は派別によって異なっている。『左氏伝』莊公二十八年には、都市の概念について次のように記載されている。

凡邑有宗廟先君之主曰都、無曰邑。

この記載から見れば、古文経系の儒家の学者は、都市の本質が祖先に対する祭祀を行う場所であり、都市のもっとも基本的要素が宗廟であると考えているようである。このため、都市の分類は、宗廟の有無により行われ、人口などの要素は都市の第一義的な要素として考えられなかったのである。

今文経系統の『穀梁伝』の僖公十六年に、民所聚謂都。

とあり、この定義は明らかに『左氏伝』での定義と異なっている。この記載には、人口要素が都市の第一義的な要素として取り扱われているのである。『穀梁伝』は典型的な今文経学派の經典であり、古文経に属する『左氏伝』とは儒家の違う学派に属する。したがって『左氏伝』の定義と『穀梁伝』の定義にある分歧は儒家の学派の間にある意見の食い違いであると考えられる。

『小爾雅』広言に、

都、盛也。

とある。この『小爾雅』は『孔叢子』に竄入しているために、清代まで偽書として認識されていたが、近年来の出土文字史料の発見及び『小爾雅』自身に対する研究により、『小爾雅』の成書の年代は前漢の後期まで遡られ、その信憑性が認められつつある³⁾。『小爾雅』の内容をみると、古文経に関わるものもあれば、今文経に関わるものもある。『小爾雅』には『公羊傳』と『穀梁傳』にしかない語彙が解釈され、『周礼』にある特有字も解釈されている。したがって、『小爾雅』の作者は古、今文経に兼通する人である。であれば、「都、盛也」という定義も古文、今文経合流の結果であると思われる。同じようなことは『白虎通』でもみられる。

『白虎通』巻四京師に、

京師者、何謂也。千里之邑号也。京、大也。

師、衆也。天子所居、故以大衆言之。

とあり、人口要素が重視されると同時に、皇権の偉大さも強調されている。『小爾雅』と同じく、『白虎通』も古文経、今文経思想が合流した結果である⁴⁾。『白虎通』は朝廷に認可された正統性をもつ書である。このため、後漢時代に至って、今文経の都市概念は正統的な都市概念として朝廷に認可されていたということになる。

要するに、戦国晩期から前漢前期までの間に、儒家の都市の概念に対する認識は学派によって二種類存在していた。古文経学派の学者は都市の第一次的な要素が宗廟であると考え、今文経学派の学者は都市の第一次的な要素が人口であると考えていた。前漢後期になってから、今文経学派の都市概念は次第に主流的なものになり、後漢時代に今文経学派の都市概念が朝廷により正統化された。

2. 都市建設用地の選択

都市にはどのような立地条件を備えるべきかという問題については、儒家の学者はとても独特な考えをもっているようである。『尚書』召誥に、

(前略) 王來紹上帝、自服於土中。旦曰、其作大邑、其自時配皇天、茲祀於上下、其自時中乂、王厥有成命、治民今休。

とあり、早くも西周時代に、「土中致治」の思想がすでに存在していた。『史記』巻四周本紀に、

成王在豊、使召公復營洛邑、如武王之意。周公復卜申視、卒營築、居九鼎焉。曰、「此天下之中、四方入貢道里均。」

とあり、『史記』巻九九劉敬傳にも別に、

成王即位、周公之属傳相焉、乃當成周洛邑、以此為天下之中也、諸侯四方納貢職、道里均矣。

とある。更に、『呂氏春秋』に、

君独不聞成王之定成周之説乎。其辞曰、惟余一人營居於成周。惟余一人有善、易得而見也。有不善、易得而誅也。

とあり、『史記』巻九九劉敬傳にも、

(天下の中心の洛邑に都として) 有徳則易以王、無徳則易以亡。凡居此者、欲令周務以徳致人、不欲依險阻、令後世嬌奢以虐民也。とあり、ここで「土中致治」思想の原点が「以徳致人」とまとめられている。

「土中致治」の思想は前漢、後漢王朝に継承されていた。『塩鉄論』巻六除狭に、

賢良曰、「古者封賢禄能、不過百里、百里之中而為都。」

とあり、『白虎通』に、

王者京師必圻土中何。所以均教道、平往來、使善易以聞、為惡易以聞、明當懼慎、損於善惡。

とある。『新書』巻三属遠に、

古者天子之地方千里、中之而為都。輪將徭使、遠者不在(出)五百里而至、公侯地百里、中之而為都。輪將徭使、遠者不在(出)五十里而至。輪將者不苦其勞、徭使者不傷其費、故遠方人安其居、士民皆有歡樂其上、之天下之所以長久也。

とあり、「土中致治」の思想は地方都市まで汎用されるようになった。

さて、このような西周から漢までの一貫不変

の「土中致治」の思想の出発点はどこにあるか。上述の史料をまとめると、「以德致人」「四方入貢道里均」と「善惡易聞」などの内容にまとめられる。「四方入貢道里均」は徭役、貢献の時の各地の負担を軽量化、平均化する「仁政」であり、「以德致人」は「徳治」の直接的な表現である。であれば、儒家が都市用地を選択する時、最も重要な基準はその場所が「仁」、「徳」の価値観にふさわしいかどうかということであると考えられる。これは後に述べる管子学派などの学者の考えとは全く違うのである。

このように「仁」、「徳」を最も重要な標準として都城建設に相応しい地域を決定し、この後、「相土」が行われ、「相土」によって具体的な建設地が選ばれる。

『周礼』卷十大司徒に、

凡建邦国、以土圭土其地而制其域。

とあり、その疏によれば、「土」はすなわち「度る」である。土圭については、同じく『周礼』大司徒に、

以土圭之法測土深，正日景以求地中。日南則景短，多暑。日北則景長，多寒。日東則景夕，多風。日西則景朝，多陰。

とある。これはそもそも人間の健康と生活にふさわしい建設用地を選択するときの科学的な行動であったが、漢代以後、この行動は次第に神秘化されてきた。『尚書』孔穎達疏引く王肅説に、

（土中は）天地之所合也，四時之所交也，風雨之所会也，陰陽之所和也。

とある。

3. 城郭構造

『周礼』考工記匠人に、

匠人営国、方九里、旁三門。國中九經九緯、經塗九軌、左祖右社、面朝後市。

とある。これによれば、儒家の都市理論では理想的な城郭構造は正方形であることがわかる。このような城郭構造には地理、地形的な要素が考えられていないので、軍事面から見れば適当なものとはいえない。そもそも儒家の学者は城

郭の軍事的効能に対して否定的な態度をもっていった。『孟子』公孫丑下に、

孟子曰、天時不如地利、地利不如人和。三里之城、七里之郭、環而攻之而不勝。夫環而攻之、必有得天時者矣。然而不勝者、是天時不如地利也。城非不高也、池非不深也、兵革非不堅利也。米粟非不多也。委而去之、是地利不如人和也。故曰域民不以封疆之界、固國不以山谷之險、威天下不以兵革之利。得道者多助、失道者寡助。

とあり、『孟子』離婁上に、

城郭不完、兵甲不多、非國之災也。田野不辟、貨財不聚、非國之害也。上無礼、下無学、賊民興、喪無日矣。

とある。戦国時期だけではなく、前漢時期の一部の儒家も同じ態度をもっている。前掲『史記』劉敬傳に、

有徳則易以王、無徳則易以亡。凡居此者、欲令周務以德致人、不欲依險阻、令後世嬌奢以虐民也。

とあり、『塩鉄論』卷九陰固に、

文学曰、「阻險不如阻義、（中略）冲隆不足為強、高城不足為固。」

とある。都市の防衛は城郭に頼らず、統治者の「徳」に頼るべきであると儒家の学者は考えているようである。

儒家にとっては、『考工記』に記載される正方形の形をする城郭は「礼」の秩序の象徴である。『孟子』告子下に、

夫貉、五穀不生、惟黍生之。無城郭、宮室、宗廟、祭祀之礼。

と「夷狄」と見なされていた「貉」族のことを描いている。この記事は孟子が城郭を「中国」と「夷狄」を区別する標識と考えることを示している。さらに、『春秋繁露』卷六立元神に、

何謂本。曰、天地人万物之本也。天生之、地養之、人成之。天生之以孝弟、地養之以衣食、人成之以礼楽、三者相為手足。合以成礼、不可一無也。（中略）三者皆亡、則民如麋鹿、各縱其欲、家自為俗、父不能使子、君不能使臣、雖有城郭、名曰虚邑。

とあり、「礼」の秩序のない城郭は「虚邑」であると論断されている。城郭が「礼」の秩序の象徴であるからこそ、儒家にとっては、城郭の分類も「礼」の秩序を基準に行われるべきなのである。『左氏伝』隠公元年に、

都、城過百雉、国之害也。先王之制，大都
不過参国之一，中五之一，小九之一。

とある。その注によれば、その「大」，「中」，「小」はいずれも都邑領主の爵位に対応するもので、その都邑に住む人口数に関係はない。

儒家は各等級の都市の建設も「礼」の秩序にしたがってなされるべきだと主張している。『公羊傳』と『穀梁傳』に斉の桓公が「興滅国」のために滅ばされた衛国に新しい邑をつくってやったことを次のように記載している。

桓公城之，曷為不言桓公城之。不与諸侯專封也。（『公羊傳』僖公二年）

諸侯不得專封諸侯，雖通其仁，以義而不与也。（『穀梁傳』僖公二年）

都市の建設の時期も「礼」の秩序によって決められている。『礼記』王制の月令章に、

（孟春月）毋置城郭。

とあり、さらに同じ月令章に、

孟夏行秋令，（中略）後乃大水，敗其城郭。とあり、「礼」の秩序を守らない人に警告している。

要するに、儒家の都市理論は、「仁政」、「徳治」を核心とし、「礼」の秩序はその表層のあらわれであり、形而上学的な特徴のある都市理論である。このような都市理論は乱世と呼ばれる東周時代には非常に実行しにくかったに違いない。事実、儒家の都市理論にあうような東周時代の都市遺跡はほとんど存在していなかったといえるであろう。漢代の人は儒家の都市理論を「昔者徐堰王行義而滅，魯哀公好儒而削，知文不知武，知一不知二。故君子篤仁以行，然必築城以自守，設械以自備。（中略）城堡者，国之固也」と評した⁵¹⁾。

なお、『穀梁伝』にある都市理論は儒家の一学派の都市理論として注意すべきだと思う。『穀梁伝』隠公七年に「城，為保民為之也，民

衆城小則益城」などの記載があり、これらの記載では「礼」の秩序が無視され、城郭の軍事の実用性が認められている。この区別は看過してはいけないうであろう。

Ⅱ 『管子』の都市理論

東周秦漢時代で、都市理論としてもっとも系統的で、もっとも上質であるのは『管子』のそれである。特に、『管子』乗馬篇の内容は、都市問題を広く論究し、中国古代においてもっとも古い都市論の専門著作だといっても過言ではないと思う。

『管子』では、都城の概念に関する記載は欠けているが、都市の建設区域の選択、建築、人口と都市の関係、都市部と農村部の関係、工業と都市の関係などが論究された。ここでその中の幾つかを検討しよう。

1. 都市建設地域と用地の選択と都市プラン

『管子』乗馬に、

凡立国都，非於大山之下，必於広川之上。
高毋近旱而水用足。下毋近水而溝防省。

とあり、また『管子』度地に、

聖人之処国者，必於不傾之地，而据地形之肥饒者，郷山左右，経水若沢。

とある。このような用地選択の発想は、純粹に経済と戦争の角度からの発想、すなわち「王覇」思想からの発想である。儒家の「仁」、「徳」など観念的なものとはいっさい関係ない。霸王の世の東周時代では、このような理論は当然最も受けいれられやすいものであろう。戦国七雄の首都をみれば、儒家の都城理論のように、国の中心部に建設された都城は一つもない。逆に、この時の都市はほとんど「広川」の側、あるいは、戦略価値のある丘陵の麓に建設されている。たとえば、邯鄲故城では「趙王城」という宮殿部は丘陵の麓に築かれ、「大北城」と「趙王城」の周辺に、沁水と渚水があり、まさに「広川の上」、「大山の下」に築かれたのである。鄭韓故

城なども自然の河川を利用し、城郭の防御性能を高めていたのである。

都市プランについては『管子』乗馬に、

城郭不必中規矩，道路不必中準繩。

とある。これによれば、管子学派の学者は疑いなく自然、地理環境にしたがって都市プランをたてることを主張している。この考えは『管子』学派の上述の都市建設地の選択問題における考えと一致し、その原点は「富国強兵」にある。この点からみれば、管子学派の思想家は儒家と相反する考えをもっている。

2. 都市と周辺地域及び人口との関係

『管子』乗馬に、

上地方八十里，万室之国一，千室之都四。中地方百里，万室之国一，千室之都四。下地方百二十里，万室之国一，千室之都四。以上地方八十里与下地方百二十里，通於中地方百里。

とあり、『管子』八観に、

夫国城大而田野浅狭者，其野不足以養其民，城域大而人民寡者，其民不足以守其城，宮宮大而室屋寡者，其室不足以実其宮，室屋衆而人徒寡者，其人不足以処其室。

とあり、都市の規模と周辺地域の土地及び人口状況とは適当な比例関係を保たなければならないと主張しているのである。『管子』乗馬にあるこのような考えは、漢代の出土文献資料にも見える。例えば「銀雀山漢簡」に、

戦国应敵・・・・固守。戦国者，外修城郭，内修甲戟矢弩。万乘之国郭方（十）七里，城方九（里，城高）九仞，池（広）百步，国城郭・・・・（郭）方十五里，城方五里，城高七仞。

とあり、『管子』の考えと類似している。

3. 都市の経済問題

『管子』学派の都市理論の内容は、都市建設に限らず、都市経済、都市社会などの問題にも言及している。特に都市経済については、その他の思想家と異なって積極的に論究している。

『管子』乗馬に、

方六里命之曰暴，五暴命之曰部，五部命之曰聚。聚者有市，無市則民乏。

とある。都市では商品交換の場所である市場が重要性をもつことを指摘しているのである。『管子』学派の学者は、すでに都市と商品交換との密接な関係を認識していた。しかし『管子』学派は本質上、都市のこのような商品経済の特質を理想的なものとは考えていないようである。『管子』権修に、

野与市争民，家与府争貨，金与粟争貴，郷与朝争治。故野不積草，農事先也。府不積貨，藏於民也。市不成肆，家用足也。朝不合衆，郷分治也。故野不積草，府不積貨，市不成肆，朝不合衆，治之至也。

とある。『管子』乗馬に、「市者貨之準也」といひながら、「是故百貨賤則百利不得，百利不得則百事治」と主張しているのである。

『管子』学派の学者は、都市経済の自由性が制限されるべきだと考えている。『管子』立政に、

論百工，審時事，弁功苦，上完利，監壘五郷，以時鈞修焉，使刻鏤文彩，毋敢造於郷，工師之事也。

とあり、商品生産の場所、時間、種類を「工師」によって制御するべきだと主張している。

『管子』学派の学者は、市場が都市に不可欠のものであると認識したが、一方、この認識と矛盾する都市の経済原則、すなわち商業を制限する経済原則を提唱した。『管子』乗馬に、

市者可以知治乱，可以知多寡，而不能為多寡。

とある。これによれば『管子』学派の学者には商品の交換過程中、商品の価額が増加するとしても価値がけっして増加しないという認識があり、この認識が『管子』学派が商業を制限する経済原則の原因であると考えられる。

Ⅲ 陰陽数術家の都市理論

宗教学的にみれば、都市は宇宙軸が貫通している土地とされている。特に、神殿、宗廟な

どがある都市あるいは首都とされる都市は、天上界と地下界の交点とも思われている。中国の陰陽数術家の思想家たちもこのように考え、陰陽数術家独自の都市理論を創立した。

1. 陰陽数術家都市理論の内容

戦国から前漢の初期まで、陰陽数術家の思想は非常に盛んであった。『漢書』芸文志に著録されている陰陽家の著作は三百六十九篇にものぼる。しかしそのほとんどは散佚している。陰陽数術家と密接な関係のある天文、五行家の書籍も同じ状況である。そのなかで陰陽数術家の都市理論の内容を窺わせる文献記事としては、次の記載があげられる。

Aグループ（東周時代に関わる史料）

『呉越春秋』巻四に、

闔閭曰、「善。夫築城郭，立倉庫，因地制宜，豈有天氣之數，以威隣国乎」。子胥曰，「有。」闔閭曰，「寡人委計於子。」子胥乃使相土嘗水，象天法地，造築大城，周回四十七里。陸門八，以象天八風。水門八，以法地八聡。築小城，周十里，陵門三。不開東面者，欲以絶越明也。立闔門者，以象天門，通闔闔風也。立蛇門者，以象地戸也。闔閭欲西破楚，楚在西北，故立闔門以通天氣，因復名之破楚門。欲東並大越。越在東南，故立蛇門以制敵国。呉在辰，其龍位也。故小城南門上反羽為兩蜺，以象龍角。

とある。

Bグループ（秦代に関わる史料）

『史記』巻六秦始皇本紀に、

焉作信宮渭南，已更命信宮為極廟，象天極。

とあり、その『索隱』に、

為宮廟象天極，故曰極廟。「天官書」曰，中宮曰天極。

とある。同じ『史記』秦始皇本紀に、

為復道，自阿房渡渭，属之咸陽，以象天極閣道絶漢抵宮室也。

とあり、その『索隱』に

謂為復道，渡渭属咸陽，象天文閣道絶漢抵

宮室也。常考「天官書」曰，天極紫宮後十七星絶漢抵宮室，曰閣道。

とある。さらに『三輔黄図』巻一に、

始皇窮極奢侈，築咸陽宮，因北陵宮殿，端門四達，以則紫宮，象帝居。

とある。

Cグループ（漢代に関わる史料）

『史記』巻八高祖本紀正義に、

顔師古曰，「未央宮雖南鄉，而當上書奏事謁見之徒皆詣北闕，公車司馬亦在北焉。是則以北闕為正門，而又有東門，東闕。至於西南兩面，無門闕矣。蕭何初立未央宮，以厭勝之術理宜然乎。」按北闕為正者，盖象秦作前殿，渡渭水属之咸陽，以象天極閣道絶漢抵宮室。

とある。その『集解』引く『関中記』に、

東有蒼龍闕，北有玄武闕。玄武所謂北闕。

とあり、さらに、その『索隱』に、

東闕名蒼龍，北闕名玄武，無西，南二闕者，盖蕭何以厭勝之法故不立也。

とある。漢長安城の城門名も十二支の意義を含み、陰陽数術家の都市理論の内容を示している⁶⁾。

三つのグループの史料に含まれている陰陽数術家の都市理論の内容は次のようにまとめられる。

- (1) 「象天法地」。例えば、呉故城では、闔闔、地門などを象った。咸陽の場合、天極、紫宮を象ったほか、「南山を表して、以て闕に為す」などの地を象ったこともある。
- (2) 十二支による正位。咸陽故城、呉故城の構造ははっきりしていないが、漢の長安城では十二支による定位が実行された。しかし、東周時代の都市遺跡中、正しく東西方向を向いた遺跡はほとんどないので、十二支による定位の発生はおそらく秦以後のことであろう。
- (3) 五行の生剋関係。呉故城の場合、前掲の『呉越春秋』の記載がこれを示しており、漢の長安城も「厭勝」の術を使っていた。

三つのグループの史料をみると、Aグループの史料に、「象天法地」、「十二支定位」、「五行の

生剋」の理論が含まれ、Bグループに、「象天法地」の理論だけが含まれ、Cグループには「象天法地」、「十二支定位」、「五行の生剋」の理論が含まれているが、Aグループの史料は後漢時代に形成されたので⁷⁾、その内容の一部には信憑性が欠けるとおもう。詳細は後に検討する。

2. 陰陽数術家の都市建設理論の形成

傳世文献で、陰陽数術家の都市建設理論に関する最も早く、信憑性のある記事は前掲『史記』秦始皇本紀の記載であると思う。しかし陰陽家と都市建設の交点は少なくとも戦国時代に遡れる。陰陽数術家の著作である「長沙子彈庫帛書」に、

女，□武。曰女，可以出師，築邑。(2)

倉，莫德。曰倉，不可以川□，大不順。(7)

蔵，□□。曰(蔵，不)可以築室。(8)

玄，司秋。曰玄，可以築室。(9)

とある⁸⁾。「築邑」はいうまでもなく都市建設のことを指す。「川」はすなわち「穿」であり、その意味は「穿土」つまり土木建築工事を行うことである。この帛書は十二の段落で構成され、十二の段落はそれぞれ一月から十二月までの各月の禁忌に関する内容である。引用を略した帛書の(3)は「司春」に関わる内容であるから、(3)の前にある(2)の記事は冬に関する禁忌であると思われる。同様に、文書の順序からみれば、帛書の(7)、(8)にある記事は夏の禁忌であり、帛書の(9)の記事は秋の禁忌である。この資料から見れば、五行思想がすくなくとも戦国時代中期にすでに陰陽数術家の都市建設理論に取入れられたと考えられる。

さて、「十二支定位」の思想はいつ陰陽数術家とその都市建設理論に導入したのであろうか。これはおそらく五行思想より遅く、戦国の末期あるいは秦代のことであろう。「放馬灘秦簡」の「日書」に、

丑牛矣以亡盜從北方喜大息盜不遠勇桑矣得。(31)

寅虎矣以亡盜從東方入(下略)。(32)

卯兔矣以亡盜從東方入(下略)。(33)

辰虫矣以亡盜者從東方入(下略)。(34)

午馬矣盜者從南方入(下略)。(36)

未羊盜者從南方入(下略)。(37)

申猴矣盜從西方(下略)。(38)

酉鷄矣盜從西方入(下略)。(39)

とある⁹⁾。木簡にある十二支と盗賊の入る方向は、今の十二支の代表する方向と同じであるので、十二支と方向の関係はこの時期前後に定型化されたのであろう。したがって、「十二支定位」の都城理論への導入は戦国晩期以後のことになる。であれば、Aグループにある『呉越春秋』に記録されている「十二支定位」に関する都城理論は漢代以後の付会である可能性がある。

陰陽数術家の都市理論が系統化されるのはおそらく前漢早期以後のことであろう。『漢書』卷三十芸文志に形法家の著作である『国朝』七卷、『宮宅地形』二十巻が収録されている。同じ『漢書』芸文志に、

形法者，大举九州之勢以立城郭室舍形。

とある。それぞれ七巻、二十巻に達する『国朝』、『宮宅地形』には相当分量の内容があるとおもう。漢代において、このような巻数の多い都市建設理論と関わる著作の出現は、陰陽数術家の都市建設理論の系統化を示唆していると思われる。

陰陽家の都市理論は陰陽五行学の発展にともなって成長してきたのである。以上の検討からみれば、戦国中期以降、陰陽五行思想は大幅に発展して、その他の各家に強い影響を及ぼしたが、陰陽五行思想が確実に都市建設に影響するのは秦代前後のことであろう。前漢時代にいたって、「五行相剋」、「象天法地」、「十二支定位」の原則が陰陽数術家の都市理論にそなわり、漢代以後の諸都城の構造の中に使用されていた。東周秦漢時代の陰陽数術家の都市建設理論の発生と発展は、これ以後の中国の都市構造に強く影響を及ぼした。

注

- 1) たとえば、ウェトルウィウスの『建築書』、フロンディヌスの『ローマ市の水道について』など。
- 2) 賀業鉅氏の研究は『中国古代城市規劃史論叢』中国建築工業出版社、1982年を参照、孫氏の研究は『建築史研究』、1982年1期を参照。
- 3) 黄懷信『小爾雅校注』三秦出版社、1992年、序章を参照。
- 4) 陳立『白虎通疏証』中華書局、1994年、1ページ。
- 5) 『塩鉄論』巻八和親。
- 6) 拙著「漢長安城の建設プランの変遷とその思想的背景」『阪南論集 人文・自然科学編』第31巻第3号、1996年1月、3ページ。
- 7) 趙曄の『吳越春秋』の成書年代については李学勤氏「時分与『吳越春秋』」『簡帛佚籍与学术史』時報出版、1994年を参照。
- 8) 秦簡整理小組「天水放馬灘秦簡甲種『日書』釈文」『秦漢簡牘論文集』甘肅人民出版社、1989年。
- 9) 同上論文。

(1999年4月1日受理)